

# 証拠性判断を表す副詞について

## ——「どうやら」と「どうも」を例に——

張 根 壽

### 1. はじめに

本稿は、副詞「どうやら」と「どうも」を「証拠性(evidentiality)」という概念を用いて統一的な記述を試みるとともに、その意味的な違いを記述したものである<sup>1)</sup>。

従来、「どうやら／どうも」は「ヨウダ／ラシイ」との共起関係から「推定」を表すとされ、「確信」「推測」を表す「きっと／たぶん」とは区別されつつも、意味的には、蓋然性や確信の度合いという基準からの連続性が指摘されてきた。その結果、両者の副詞類は、「ヨウダ／ラシイ」と「ダロウ」との共起制限に違いが見られるという指摘に止まり、具体的に意味・構文上、どういう違いがあるかという問題についてはそれほど注目されてこなかったと言える。

本稿では、「どうやら／どうも」と「きっと／たぶん」が表される意味の違いは、従来の蓋然性という概念だけでは説明しきれず、証拠性という概念を導入することによって区別できることを主張する。また「どうやら」と「どうも」は、述べられる内容が証拠に裏づけられている点では類似しているが、話し手が命題内容をどのように捉えているかという基本的な意味には違いがあることを論証する。

### 2. 先行研究

証拠性が問題となる表現形式としては、「ヨウダ／ラシイ」のような文末形式と副詞的成分が挙げられる。本節では、証拠性の概念規定とそれに関する先行研究、および副詞の分類上の問題を検討し、その問題点を指摘する。

証拠性はアメリカの記述言語学において盛んに研究されてきた概念である。代表的な研究としては、Chafe, W. et J. Nichols (eds.) (1986) がある。証拠性が表される表現形式は言語によって異なるが、中でも、アメリカ先住民の言語の場合、証拠性を表すマーカーとして動詞の接尾辞を持つ言語である点で注目されてきた<sup>2)</sup>。

証拠性の概念規定に関しては、研究者によって多少のずれが見られるが、「情報の出所」「証拠による認識」という規定は概ね一致している。

日本語における証拠性という概念は、寺村(1984)の「確言／概言のムード」、仁田

(1989, 2000) の「判断／認識のモダリティ」、森山 (1989) の「認識的ムード」、三宅 (1994) の「認識的モダリティ」、宮崎 (2002) の「認識のモダリティ」などの用語のもとで扱われ、主に「ヨウダ」「ラシイ」「ミタイダ」「(シ)ソウダ」「(スル)ソウダ」などの形式が考察の対象になっている。

このような研究の中で、三宅 (1994) は「認識的モダリティ」の下位類の中、「実証的判断 (命題が真であるための証拠が存在すると認識する)」を設け、「実証的判断」が表される形式に「ラシイ／ヨウダ／ミタイダ／ソウダ／トイウ」を挙げている。「実証的判断」は Evidentiality という概念に基礎を置いたものであるとしている。三宅の研究は、「ヨウダ」と「ラシイ」が表す意味の違いという問題よりも、証拠の存在を示すという共通の意味を強調している点、伝聞の「ソウダ／トイウ」を「実証的判断」のカテゴリーの中で説明している点で注目される。

次に、日本語の副詞分類と証拠性の問題に関しては、Aoki, H. (1986) の開拓的な研究がある。証拠性の実現されるものは「動詞句」「副詞句」「ポライトネス」に分けられている。そのうち「副詞句」の分類を見ると、「まちがいなく／うたがいなく／たしか (に)／かならず／さだめし／きっと／さぞ」、「たぶん／おそらく／どうやら」、「もしかすると／ひょっとして」の順に真偽値の程度の違いがあると指摘している。

しかし、証拠性と真偽値の程度という意味がどのように関わっているのかという点是不明で、また「たぶん／おそらく／どうやら」が真偽値の程度というスケールのみで同等に扱われている点などは問題として指摘できる。結局、Aoki の副詞分類は、基本的に英語の副詞分類と平行しているものと言える<sup>3)</sup>。

本稿で考察する副詞は、工藤 (2000) では「叙法副詞」の名で分類されている。その下位類の「認識的な叙法」には、さらに「断定」「確信」「推測」「推定」「不確定」「伝聞」などの下位類を設けている。「どうも」「どうやら」は「推定」、「きっと」「たぶん」はそれぞれ「確信」「推測」という別のカテゴリーとして分類されてはいるものの、その関係においては、事態実現の确实さ (蓋然性) や話し手の確信の度合いに違いが見られると述べている。

工藤の研究は、いわゆる陳述副詞の精密化や下位分類の可能性を提示している点で大変評価される。しかし、「確信」「推測」「推定」という概念の明確な規定がなく、意味・構文的にどのような違いがあるかについては述べていない。

最後に、森本 (1994) は「どうも／どうやら」を [一過去平叙文] [一だろう] の共起条件を持つ副詞として分類し、「これらの副詞は、文の内容 (= 推論) の真実性が、ある程度証拠 (= 認識的経験) に裏付けられていることを示すのである (p.93)」と述べ、副詞と証拠性のカテゴリーとの問題について説明している<sup>4)</sup>。

森本の研究は、日本語の副詞研究に証拠性という概念を取り入れ、「どうも／どうやら」を蓋然性の副詞から区別しようとしている点は評価される。しかし、「認識的経験」という概念には問題があり<sup>5)</sup>、また証拠性の副詞とその他の推量的な副詞の違いがどのような言語現象として実現されるのかという問題については指摘していない。

### 3. 「どうやら／どうも」に見られる証拠性判断

本節では「どうやら」と「どうも」の用法のうち、特に、証拠性が問題となる用法を中心に説明する。「どうやら／どうも」は、何らかの証拠の存在をもとに、命題内容を認識するという意味の類似性が見られる。次の(1)(2)の例は、文脈上、証拠というものが言語化されている。

- (1) 部屋のなかには日光と色彩が充満し、無数の画からたちのぼる個性の香りで空気が温室のような豊満さと息苦しさをおびていた。どうやら大田氏はみごとに成功したようである。(パニ)
- (2) 「どうも登志子は熱があるらしい。顔が赤い」(孤高)

(1)の「どうやら」は、前の文脈で言語化されている内容を証拠に、そこから推論した結果、[大田氏はみごとに成功した]という命題内容を導き出している。(2)の「どうも」の場合も、[顔が赤い]ことが[登志子は熱がある]と判断するための証拠となっている。

命題を導き出すための証拠となるものは常に言語的に実現されているとは限らない。次の例は、証拠の存在が言語的に示されていないが、伝聞、もしくは相手の行動の観察などの何らかの証拠をより所にそれぞれの命題を認識していると解釈される。

- (3) 「いえね……。どうやらうちの会社、倒産したらしいですよ」(女社長)
- (4) 「あんたはどうもまだこの仕組がよくわかっていないようだな」(世界)

ところが、(1)～(4)の例に見られる証拠性も副詞ではなく、「ヨウダ／ラシイ」のような文末形式によってもたらされているとも考えられる。そこで、「どうやら」と「どうも」が「ヨウダ／ラシイ」以外の形式、あるいは確言形と共起している例を観察する。

- (5) 彼はいつもの厚いコートを着て前にひさしのついた作業用の帽子を深くかぶっていた。コートにも帽子にも白い雪の粒がべったりとついていた。「どうやら今夜あたりはずいぶん積りそうだね」と彼は言った。(世界)
- (6) 「宿屋もずいぶんあるんだねえ」  
「うん、山形屋だの、丸惣だの、けっこう大きな旅館があるよ」  
「北海道というと、ただ山か野のように思っていたが、どうも認識不足だったね」(塩狩峠)

(5)の「どうやら」は[コートにも帽子にも白い雪の粒がべったりとついていた]ことを証拠に、そこから推論した結果、[今夜あたりはずいぶん積る]という予想を働かせ

ている。(6)の「どうも」の場合も、[宿屋もずいぶんある][～大きな旅館がある]という内容を証拠に、[認識不足だった]と判断している。

以上の例から「どうやら／どうも」は、述べられる内容が証拠に基づいているという点で共通していることを確認した。一方で、「どうやら」と「どうも」は用いられる用法に違いが見られ、しかも、命題内容に対する話し手の把握の仕方にも違いがある。「どうやら」と「どうも」の意味・使用状況の違いについては5節で説明する。

#### 4. 「証拠性」と「蓋然性」の違い

本節では、「どうやら／どうも」と「きっと／たぶん」の共起制限、意味・構文的な違い、使用状況の違いを分析し、証拠性と蓋然性の違いがどのような言語現象として実現されるのかという問題について考察する。

##### 4.1. 共起制限の違い

両副詞群の共起制限の違いを確認するために、副詞と文末形式の共起関係を対象とした調査を行った。以下の表1は、個々の副詞がどのような形式とどれだけ共起しているかを示したものである。

表1 副詞と述語部との共起関係

副詞 (計) \ 述語部	スル φ	形式 名詞十 ダ	ノ ダ	シ ソウ ダ	ヨ ウ ダ	ラ シ イ	ハ ズ ダ	カ モ シ レ ナ イ	ニ チ ガ イ ナ イ	ダ ロ ウ ・ マ イ	ト 思 ウ	ノ デ ハ ナ イ カ	ダ ロ ウ カ
どうやら (272)	19		2	18	81	140		2		1	6	2	1
どうも (190)	18		4	13	82	55		2			8	8	
きっと (667)	212	6	84		2	1	13	12	94	202	31	8	2
たぶん (399)	41	7	20	2	2	3	7	8	14	217	56	22	

- ・用例は『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』の中、日本人作家の作品から採集した。
- ・述語部の形式は代表形を取る。たとえば「ヨウダ」は「ミタイダ」「ヨウに」「ヨウナ」「ヨウダッタ」「ヨウナ気ガスル」「ヨウニ思ワレル」などを含む。
- ・「ノデハナイカ」は「(ノ) デハナイ (デショウ) カ」などを含む。
- ・「ダロウカ」は「(ノ) デアロウカ」「デショウカ」「カナ」「カシラ」などを含む。
- ・「どうやら」は「どうにか辛うじて」「何やら」の意味を表す例は含まない。
- ・「どうも」は「どうやら」の意味に近づく用例だけを対象とした。
- ・「きっと」は確信的意味に用いられる用例のみを数えた。

表1で注目すべき共起現象は、「どうやら／どうも」は「ヨウダ／ラシイ」文に現れやすく、「ダロウ」文には現れにくいという傾向性が見られる点である。逆に「きっと

／たぶん」は「ダロウ」文には自然に現れるが、「ヨウダ／ラシイ」文には現れにくいという現象が指摘できる。この意味で、両副詞群はそれぞれ「ヨウダ／ラシイ」と「ダロウ」が持つ意味に近い性質を持っていると言える。

そこで、「ラシイ／ヨウダ」と「ダロウ」の構文的な違いを指摘した研究から、以下の現象が副詞にも適用され得ることを確認する。次の例は三宅（1994：p.26）からの引用である。

- (7) 彼女、うれしそうな顔をしている。合格した [     ]。  
部屋の手元がつかっている。彼女はまだ勉強している [     ]。

(7)の [     ] には「ラシイ／ヨウダ」は自然に生起できるが、「ダロウ／カモシレナイ」のような形式は生起できない。自然にするためには「ノダ」を介する必要があると述べている。このような現象は、次例の副詞のテストからも同様なことが言える。

- (8)a. 彼女、うれしそうな顔をしている。どうやら／どうも合格したようだ／らしい。  
b. 彼女、うれしそうな顔をしている。\*どうやら／\*どうも合格したのだろう。  
(9)a. 彼女、うれしそうな顔をしている。きっと／たぶん合格したのだろう。  
b. 彼女、うれしそうな顔をしている。\*きっと／\*たぶん合格したようだ／らしい。

(8)(9)のように、「どうやら／どうも」は「ヨウタ／ラシイ」と共起するのが自然で、「ダロウ」とは共起しない。逆に「きっと／たぶん」は「ヨウタ／ラシイ」とは共起せず、「ノダロウ」を伴う必要がある。このように、両副詞群が蓋然性や確信の度合いの違いという点で連続的な関係にあるとする立場からは、なぜ「きっと／たぶん」が「ヨウタ／ラシイ」と共起しないのか、「どうやら／どうも」が「ラシイ」と意味的にも近い「ノダロウ」とはなぜ共起しないのかという説明が難しくなる。

さらに、両副詞群の共起制限の違いは、文末のモダリティ形式の他に、確言形の動詞述語文において次のような違いが見られる。

- (10)a. 佐藤さんはきっと／たぶん戻ってくる。  
b. この問題はきっと／たぶんまちがっている。  
(11)a. 佐藤さんは\*どうやら／\*どうも戻ってくる。  
b. この問題はどうやら／どうもまちがっている。

(10)の副詞の場合、「戻ってくる」「まちがっている」のように、「ル形」で未来を表す動詞とも、「テイル形」で現在の状態を表す動詞とも共起できる。それに対して(11)の場合は、「戻ってくる」のような「ル形」で未来を表す動詞とは共起しない。

ただ、(11)aは文末に「ヨウダ／ラシイ」を付けると許容量が上がると思われるが、

このような用例の使用頻度が「きつと／たぶん」に比べはるかに低い。本稿では、表1の副詞の全用例を対象に、「ル形」で未来を表す用例数の割合を調査した。その結果、「きつと」は667例中258例、「たぶん」は399例中46例が確認できた。一方、「どうやら」は「ル形」で未来を表す用例が2例、「どうも」は1例が確認された。この用例数の割合の違いからも、両副詞群は連続的な関係にあるのではなく、本質的に異なる性質を持つ副詞として扱うべきであると考えられる。

#### 4.2. 意味・構文的な違い

前節で確認した共起制限の違いは、意味・構文的な違いにも影響を与えると考えられる。再び三宅(1994)を引用すると、「ヨウダ／ラシイ」のような形式は、命題が真であるための証拠の存在を認識するという特性から、命題が未実現のことを表す内容であっても、未来の事態に対する認識にはなり得ず、あくまで現在の事態に対する認識になると指摘している。そのテストとして、「ダロウ／カモシレナイ／ニチガイナイ」は「～と予告する」「～と予言する」「～と予想する」などの補文に入るのに対して、「ヨウダ／ラシイ」は入ることができないと説明している。この現象は、次の副詞の違いを説明するためにも有効であると思われる。

- (12)a. きつと／たぶん明日は雨だ [と予想／予測した]  
b. \*どうやら／\*どうも明日は雨だ [と予想／予測した]

(12)aの副詞は [と予想／予測した] の補文に入るのに対して、(12)bは [と予想／予測した] の補文に入らないことから両者の違いが確かめられる。(12)bの副詞が成立しない意味的な理由も、現在の事態に対する認識を表す副詞の意味と [と予想／予測した] が持つ未来の事態に対する認識という意味の不整合性によるものと考えられる。

さらに、両副詞群が持つ未来の事態に対する認識か、現在の事態に対する認識かという違いは、次の条件文、あるいは反実仮想文に生起するか否かという現象とも関わっている<sup>6)</sup>。

- (13)a. この薬を飲めば、きつと／たぶん楽になる。  
b. この薬を飲めば、\*どうやら／\*どうも楽になる。  
(14)a. 彼の助けがなかったら、今頃きつと／たぶん死んでいた。  
b. 彼の助けがなかったら、今頃\*どうやら／\*どうも死んでいた。

これらの条件文は、前件が成立する条件で後件の事態が成立するという関係を表すもので、「どうやら／どうも」が生起できない理由は、現在の事態に対する認識の欠如によるものと考えられる。また、「きつと／たぶん」のみが生起できる理由も、これらの副詞の意味は確信・推測というものであり、この点で「どうやら／どうも」とは異なる

性質を持っていると言える。

#### 4.3. 使用状況の違い

「きっと／たぶん」の場合も、話し手の認識的な態度を表すものであり、当然、命題を認識するための何らかの証拠というものが必要であると考えられる。本稿では、「どうやら／どうも」と「きっと／たぶん」の違いは、命題を導くための証拠の存在が常に保証されているかどうかにあると考える。

「どうやら／どうも」は、常に証拠の補足による認識が行われているのに対して、「きっと／たぶん」は、証拠の存在には直接関与せず、あくまで推測による認識が行われている。次の例の「きっと／たぶん」は[彼らは生きている]と判断するための証拠・根拠を必ずしも必要としない。

(15)a. 根拠はありませんが、彼らはきっと／たぶん生きていると思います。

b. 根拠はありませんが、彼らは\*どうやら／\*どうも生きているようです。

(15)a が言えるように、「きっと／たぶん」は単なる思いこみや推測でも用いることができる。一方「どうやら／どうも」は、(15)b が言えないことから窺えるように、必ず何らかの証拠の存在が要求される。このような両副詞群の意味の違いは以下の例に見られる使用状況の違いにも反映されている。

(16) (ある会社の経営に関する新聞記事の内容を相手に伝える場面)

a. どうやら／どうもあの会社は経営が危ないようだ／らしい。

b. \*きっと／\*たぶんあの会社は経営が危ないのだろう。

(16)の[あの会社は経営が危ない]という命題内容は、話し手が新聞の内容から得られた既得情報(知識として蓄積されている情報)である。「どうやら／どうも」は、話し手が知っている内容でもその内容が何らかの証拠によって補足されれば用いられる。それに対して「きっと／たぶん」が用いられない理由は、話し手が知っている情報を推測するという意味の矛盾が生じてしまうからであると説明できる。

次に、伝聞表現との共起可能性も両副詞群の意味的な違いを弁別する言語現象の一つとして考えられる。次の例のように、「どうやら／どうも」は伝聞表現と共起し、伝聞内容も証拠にすることができるのに対して、「きっと／たぶん」の場合は伝聞表現とは共起できない。

(17) 「聞くところによると、きみの社はどうも衛生局に信用がないようだから、誤解をとくため、ていねいに説明したらすむことではないかな」 (人)

(18) 父から聞いた話だが、どうやら会社の経営が破たんしたらしい。

(17)は「聞くところによると」という伝聞による情報獲得であることを示す表現と「どうも」が同一の文中に現れ、[きみの社は衛生局に信用がない]ことが間接的な伝聞内容であることが分かる。(18)の「どうやら」も同様なことが言える。(17)(18)の副詞を「きっと／たぶん」に置き換えることはできないが、その理由も伝聞内容はすでに獲得した既得情報であるからと説明できる。

以上の違いから、「どうやら／どうも」は常に証拠の存在をもとに命題を認識する副詞であるのに対して、「きっと／たぶん」は話し手の確信・推測を表す副詞であり、証拠の存在には中立であると言える。4節の分析の結果を表2にまとめる。

表2 「どうやら／どうも」と「きっと／たぶん」の違い

両副詞群の違い		副詞	「どうやら／どうも」	「きっと／たぶん」
共起制限の違い	文末形式との共起制限		[-ダロウ/＋ラシイ]	[＋ダロウ/－ラシイ]
	動詞述語との共起制限		[＋テイル形/－ル形]	[＋テイル形/＋ル形]
意味・構文的な違い	事態の性質の違い		[＋現在/－未来]	[＋現在/＋未来]
	条件文/反実仮想文		－	＋
使用状況の違い	既得情報		＋	－
	伝聞表現との共起		＋	－

## 5. 「どうやら」と「どうも」の違い

「どうやら」と「どうも」は、同じく証拠性に関わるという点で類似しているが、置き換えが不可能な用例も多く、その使用条件には違いが見られる。本節では、「どうやら」と「どうも」が持つ基本的意味を記述するとともに、副詞の意味の違いがどのような用法や使用状況の違いに反映されているのかという問題について検討する<sup>7)</sup>。

従来の研究で「どうやら」と「どうも」の違いは以下のように説明されている。(19)～(22)の説明は、慣用化された用法を除いては「どうやら」と「どうも」のほとんどの用法を対象とした意味解釈である。

- (19) 「どうやら」…「その対象の真の姿がはっきりとはわからないものの、おおよそその輪郭がつかめてきた状態」 (森田 1988 : p.781)
- (20) 「どうも」…「事柄の実態・真実がじゅうぶんにつかめないにもかかわらず、なぜそうなるのかその理由がはっきりわからないため、しかと断定できない推量的気分を残した言い方に用いる」 (森田 1988 : pp.779-780)
- (21) 「どうやら」…客観的な根拠の存在が暗示されるので、推量の内容としてはかなり確実である。この「どうやら」は「どうも」に似ているが、「どうも」は



客観的な根拠の暗示がなく、主観的に推量しているだけなので、推量の内容としては不確かであることが多い。(飛田・浅田 1994 : p.332)

- (22) 「どうも」と「どうやら」は、いずれも、証拠性機能を示すが、話し手の態度に不確実性が含まれる点で共通しながら、その程度は異なっている。話し手が真実についてよりはっきりしたという自覚をもつのは、「どうやら」のようである。(森本 1994 : p.96)

以上の研究で指摘されている「どうやら」と「どうも」の違いは、確実性の程度の違い、証拠・根拠の性質(主観的・客観的)の違いの二点にまとめられる。しかし、このような指摘だけでは「どうやら」と「どうも」の用法の違いをすべて説明することはできないように思われる。まず、証拠・根拠の性質の違いからは、次の例のように「どうやら」と「どうも」の置き換えが可能な場合の説明が困難である。

(23) 「どうも登志子は熱があるらしい。顔が赤い」 (= (2))

(24) 私、どうやら風邪を引いたようです。少し熱があります。

(25) 「聞くところによると、きみの社はどうも衛生局に信用がないようだから、誤解をとくため、ていねいに説明したらすむことではないかな」 (= (17))

これらの例に見られる証拠とは、(23)の場合は「(登志子の)顔が赤い」という相手の様子から、(24)の「少し熱がある」は話し手自身の様子から捉えられたものである。(25)は伝聞内容が証拠になっている。これらの証拠・根拠というものを観察する限り、どちらが主観的か客観的かという判断は難しく、証拠の性質の違いは「どうやら」と「どうも」の違いを裏づける決定的な要因ではないと考えられる。

次に、「どうやら」と「どうも」の確実性の程度の違いという問題を取り上げる。(23)～(25)の副詞が生起可能な理由として、命題内容に対する不確実性、話し手による事実の未確認というものが挙げられる。たとえば、(23)(24)の副詞は、事実判定が証拠に裏づけられてはいるものの、その判定が断定までには至らず、不確かさの余地を残している。(25)の命題内容も伝聞によるもので、話し手による直接的な確認はまだ行われていない。上例の「どうやら/どうも」は、命題内容が証拠に裏づけられていること、そして、その内容の不確かさ・未確認を表すものであって、確実性の程度を積極的に表すものではない。たとえば、(25)のように同じく伝聞内容を証拠にしている副詞からより確実なものを抽出することがはたして可能であるかという疑問が残る。

### 5.1. 副詞の意味規定

「どうやら」と「どうも」の違いを説明するためには、証拠の性質や確実性の程度という基準よりも、副詞が持つ基本的な意味の記述がより有効であることを主張する。両副詞には、命題内容を話し手がどのように捉えているかを弁別する意味的な違いが見ら

れるからである。「どうやら」と「どうも」が持つ基本的意味を以下のように規定する。

(26) 「どうやら」：命題内容と証拠との関係が話し手の推論に基づいていることを表す副詞

「どうも」：(証拠から導き出された) 現実の世界と話し手の予想や期待の世界とのずれを表す副詞

以下、(26)の意味規定の妥当性を主張するために、「どうやら」と「どうも」の意味的な違いがどのような現象として具現化されるのかという問題について考える。次の例の「どうやら」と「どうも」の判定には違いが見られる。

- (27) どうやら／\*どうも太郎は試験に受かったらしい。思った通りだ／予想通りだ。  
(28) 受かるとは思わなかったが、どうやら／どうも太郎は試験に受かったらしい。  
(29) どうやら／\*どうも伸子の想像した通りのようで、三枝はわざわざ高いレストランへ入って、「どうぞ何でも食べて下さい、社長」とすすめる。 (女社長)  
(30) どうやら／\*どうも私の予想通りの結果になりそうだ。

(27)は「思った通りだ／予想通りだ」という表現からも分かるように、[太郎は試験に受かった]という内容が話し手の予想と一致している。このような状況下では「どうも」は用いられない。「どうも」の使用条件としては、(28)のように、現実の世界である命題内容と話し手の予想の世界とのずれというものが必要である。(29)(30)の「どうも」が用いられないのも、「想像した通り」「予想通り」という表現を伴うことによって、命題内容と話し手の予想が一致しているからであると解釈できる。

ここで「どうも」の意味規定を補足すると、「どうも」が持つ「ずれ」とは、現実の世界と予想や期待の世界との心理的な不一致のことであって、必ずしも矛盾するあるいは相反する関係ではない。次の例の「どうも」はその関係が言語的に示されている。

(31) 「宿屋もずいぶんあるんだねえ」

「うん、山形屋だの、丸惣だの、けっこう大きな旅館があるよ」

「北海道というと、ただ山か野のように思っていたが、どうも認識不足だったね」

(= (6))

(32) あたりまえのおとぎ話のつもりで引っぱり出した本なんだが、あれはどうも、ただのおとぎ話とは違っているようだ。 (路傍)

(31)は「認識不足だった」という命題内容と話し手の当初の予想とのずれを表し、(32)の場合も、[ただのおとぎ話とは違っている]ことが話し手の予想とは違っていることを表している。

## 5.2. 使用状況の違い

本節では「どうやら」と「どうも」の意味の違いがどのような使用状況の違いに反映されているかについて考える。次の例は「どうやら」は自然に使われるが、「どうも」は不自然な例である。

- (33) (病院での会話の場面：体温計を見て医者が発する言葉)  
安心してください。どうやら／\*どうも熱は下がったようです。
- (34) (野球中継の場面：監督が審判に選手の名前を告げている)  
監督出てきました。どうやら／\*どうも選手交代のようですね。
- (35) 十月のはじめのおだやかで気持の良い夜だった。空を覆っていた雲はどこかで切れて、そのあいだから満月に近い月が見えた。明日はどうやら／\*どうも良い天気になりそうだった。(世界)

上例は、いずれも命題内容を導き出すための十分な証拠がそろっているにも関わらず、「どうも」は用いられない。その理由としては、これらの例の事実判定がもっぱら論理的な推論に基づいていること、そして現実の命題内容と話し手の予想とにずれが生じないという二つの要素が働いているからであろう。前者が「どうやら」が成立する条件で、後者が「どうも」の不成立の理由である。

たとえば、(33)の「熱は下がった」という判断を下すためには、それなりの十分な証拠（ここでは体温計）による推論が必要であり、かつ、命題内容と話し手の予想との関係にずれがあってはならない。(34)も試合の中継という性格上、証拠から把握した事実内容をそのまま伝えることが要求される場面であるので「どうも」は用いられない。(35)の場合も、前に言語化されている証拠をもとに、そこから推論して、命題内容を述べている。さらに「どうやら」が予想の意味の「シソウダ」と共起していることから、現実の世界と予想の世界が一致していることが分かる<sup>8)</sup>。

これらの例で「どうも」が生起するためには、たとえば「どうも熱が上がったようです」「どうも天気がよくなりそうもない」のように文脈の条件を整え、命題内容と話し手の予想とのずれを生じさせる必要がある。

次に、「どうも」は自然に使われるが、「どうやら」は不自然な例を観察する。

- (36) 「年のせいかな。どうも／\*どうやら疲れるようだ」(塩狩峠)
- (37) (二種類の飲み物を飲み比べてみて)  
どうも／\*どうやらこっちの方がおいしい。
- (38) 写真を貼り終り、横のソファに坐っていた利朗が、私のそんな気持を察したらしく、言った。  
「どうも／\*どうやら、この数日、かったるそうなんだ」  
「やっぱり風邪なのかな」

私が言うと、利朗は首をかしげた。

「どうなんだろう。とにかく、冴えないんだ」 (一瞬)

(36)～(38)の「どうも」は、話し手の直接経験による印象や感覚を表す文に用いられている。「どうやら」と「どうも」の違いを確実性の程度にあるとする立場からは、より不確実な「どうも」がなぜ直接経験に用いられるのかという説明ができなくなる。

これらの例で「どうやら」が用いられない理由は、命題内容と証拠との関係に推論という論理性が不足しているからであると言える。言い換えれば、「どうやら彼も疲れているようだ」「(相手の飲み方を見て) どうやらこっちの方がおいしいらしい」のような推論の働きが要求される状況下なら「どうやら」は生起できる。それに対して「どうも」は、命題内容と話し手の予想や期待との関係にずれがあることだけに言及する副詞であって、必ずしも命題と証拠との論理関係は必要としない。

「どうも」が持つ「ずれ」という意味は、次の例のような話し手の否定的態度を表す用法にもつながっていくと考えられる。

(39) 「…どうも、上手く言えませんが……」 (砂の女)

(40) 「どうも気に入らないわね……」 (女社長)

(41) 「あれにしちゃ、どうもおかしいなと思ったのよ、あたしも。」 (忍ぶ)

(42) 私は大きな組織というのがどうも苦手なのだ。 (世界)

(43) どうもこのマンション、使えそうもないなと純子は思った。 (女社長)

森本(1991)は、話し手の否定的態度を表す「どうも」について、「否定的態度は、主張の正しさに対する不確実性という意味の語用論的バリエーションのひとつといえるかもしれない(p.805)」と述べ、「どうも」の否定的態度の要因を不確実性に求めている。しかし、不確実性という意味が否定的態度につながるという必然性は認められない。たとえば、蓋然性判断を表す副詞の場合、「きっと」に比べ不確実であることを表す「たぶん」に否定的態度は見られない。

(39)～(43)の例もすべて「思った通り／予想通り」のような表現との共起が不可能であることから、「どうも」が持つ否定的な意味は、現実の世界と話し手の予想や期待の世界とのずれから生じたものと考えられる。

最後に、「どうやら」と「どうも」の意味・使用状況の違いから、表1の共起関係の違いを簡単に説明する。両副詞は、ともに「ヨウダ」「ラシイ」と共起する用例数が多いが、「どうやら」は「ラシイ」と、「どうも」は「ヨウダ」と共起する割合が高い。まず、「どうやら」が「ラシイ」と共起しやすいのは、「どうやら」と「ラシイ」に見られる「推論」という意味の類似性によるものと考えられる。次に「どうも」は「ヨウダ」と共起する割合が高いが、「どうも」は、話し手の直接経験や感覚・印象を表す例に多く用いられる<sup>9)</sup>。このような状況では「ラシイ」は使えず、「ヨウダ」しか使えないとい

う制約によるものと説明できる。

## 6. まとめ

本稿では、副詞研究における「証拠性(evidentiality)」という概念の有効性という観点から、「どうやら／どうも」と「きっと／たぶん」の共起制限、意味・構文的な特徴、さらに「どうやら」と「どうも」の意味の違いという問題について考察した。本稿の結論は、以下の二点にまとめられる。

第一に、「どうやら／どうも」と「きっと／たぶん」は、蓋然性という概念だけでは説明しきれず、証拠性という概念を導入することによって区別することができる。「どうやら／どうも」は、述べられる内容が何らかの証拠に基づいているという共通の意味を持つ点で、証拠性判断を表す副詞として位置づけることができる。一方、「きっと／たぶん」は、証拠の存在には中立で、「確信」「推測」のような命題の実現に対する蓋然性判断を表す副詞であると言える。

第二に、従来「どうやら」と「どうも」の違いは、証拠の性質や確実性の程度にあるとされてきたが、話し手が命題内容をどのように捉えているかという基本的な意味に違いがある。「どうやら」は、命題内容と証拠との関係が推論に基づいていることを表すが、「どうも」は、現実の世界(命題内容)と話し手の予想や期待の世界とのずれを表すという異なる性質を持つ。「どうやら」と「どうも」が用いられる用法や使用状況の違いは、このような意味規定によって説明できる。

## 注

- 1) 証拠性が表される副詞的成分としては、他にも「なんでも／聞けば／～によると」のような「伝聞／情報源」を表す種々の表現、そして、副詞「たしか」などが挙げられる。これらの副詞的成分は、言及する内容がそれぞれ伝聞、話し手の記憶に基づいていることを示すという点で、証拠性のカテゴリーに属すると考えられる。これらの副詞については、別稿で論じることとする。
- 2) 日本語学では、寺村(1984)が「アメリカインディアン語の中に、日本語のソウダ、ラシイ、ヨウダなどに似た用法をもつ形態素を、セットとしてもつ言語がある(pp.224-225)」と、ごく簡単に証拠性について触れている。
- 3) 証拠性に基礎を置いた英語の副詞分類については、Chafe, W.(1986)を参照。
- 4) 森本(1994)は「明らかに」についても、確実さのスケール上「どうも」「どうやら」と平行しているとし、同じく証拠性機能の副詞として位置づけている。しかし、「明らかに」は「どうも」「どうやら」とは違って、たとえば「明らかに彼が正しい→彼が正しいのは明らかだ」のような言い換えが可能である。この点で「明らかに」は、「確かに、もちろん、当然」などの「評価／注釈副詞(成分)」との関連性も問題となる。「評価成分」に関する記述は、工藤(1997)を参照されたい。
- 5) 森本は「どうもわからない／どうも来ない」のような否定文に現れる「どうも」も、話し手の「認識的経験」に基づく証拠性が認められると述べているなど、「認識的経験／証拠」という概念で説明できる言語現象の範囲が限りなく広いという問題点がある。
- 6) 条件文における「どうやら／どうも」の現れ方は、その環境によって異なる。条件文でも現在の事態に対する認識に用いられる場合は生起可能である。
- 7) 以下の例の「どうやら」と「どうも」は、かなり慣用化された用法であるので、本稿の考察の対象

からは外す。

- (i) 「いろんなことをやっているよ。どうやら食って行ける程度だが」 (冬)  
(ii) 「や、これはどうもとんだご無礼をいたしました」 (塩狩峠)  
(iii) 「どうもありがとう」

- 8) 表1を参照すると、「どうやら(18例)」「どうも(13例)」が「シソウダ」と共起しているが、未来の予想の意味の「シソウダ」と共起している用例数は、「どうやら」が10例、「どうも」は1例も見つからなかった。「どうも」の13例はすべて、「駄目ソウダ」のような現在の様態、あるいは「ナソウダ」「シソウ(ニ)モナイ」のような否定形を伴っている例である。
- 9) 「どうやら」と「どうも」が「ヨウダ」と共起する例の中、「ような気(感じ)がする／ような気持ちである」のような話し手の感覚・印象を表す例は、「どうやら」が5例、「どうも」が18例で、用例数に違いが見られる。

## 用例出典

(パニ)…開高健「パニック・裸の王様」、(孤高)…新田次郎「孤高の人」、(女社長)…赤川次郎「女社長に乾杯!」、(世界)…村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」、(塩狩峠)…三浦綾子「塩狩峠」、(人民)…星新一「人民は弱し官吏は強し」、(路傍)…山本有三「路傍の石」、(一瞬)…沢木耕太郎「一瞬の夏」、(砂の女)…安部公房「砂の女」、(忍ぶ)…三浦哲郎「忍ぶ川」、(冬)…立原正秋「冬の旅」(以上、CD-ROM版新潮文庫の100冊所収)

## 参考文献

- 工藤 浩 (1997) 「評価成分をめぐって」『日本語文法——体系と方法——』ひつじ書房  
工藤 浩 (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店  
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版  
仁田義雄 (1989) 「現代日本語のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお出版  
仁田義雄 (2000) 「認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店  
飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版  
三宅知宏 (1994) 「認識的モダリティにおける実証的判断について」『国語国文』63-11  
宮崎利人 (2002) 「認識のモダリティ」『モダリティ』第4章、くろしお出版  
森田良行 (1988) 『基礎日本語辞典』角川書店  
森本順子 (1991) 「副詞の意味構造」—「どうも」をめぐって—『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂  
森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版  
森山卓郎 (1989) 「認識のモードとその周辺——認識的モードの形式をめぐって——」『日本語のモダリティ』くろしお出版  
Aoki, Haruo (1986) 'Evidentials in Japanese' in Chafe, W. et J. Nichols (eds.) *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*. Ablex Publishing.  
Chafe, Wallace (1986) 'Evidentiality in English Conversation and Academic Writing' in Chafe, W. et J. Nichols (eds.) *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*. Ablex Publishing.

(チャン コンス 筑波大学大学院博士課程 文芸・言語研究科 日本語学)